

Sun. Jun 12, 2022

第1会場

シンポジウム | シンポジウム | [シンポジウム9] スポンサーシンポジウム：咀嚼研究の最新像

シンポジウム9

スポンサーシンポジウム：咀嚼研究の最新像

座長：井上 誠（新潟大学大学院医歯学総合研究科摂食嚥下リハビリテーション学分野 教授）、山村 健介（新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔生理学分野 教授）

9:00 AM - 10:00 AM 第1会場（リ्यूとぴあ 2F コンサートホール）

[SY9-1] 咀嚼嚥下のプロセスを生体記録と食塊物性から評価する

○真柄 仁（新潟大学 医歯学総合病院 摂食嚥下機能回復部）

[SY9-2] 咀嚼能力と全身健康 -咀嚼チェックガムを用いた咀嚼能力評価-

○瀧 洋平（東京医科歯科大学 高齢者歯科学分野）

[SY9-3] 「咀嚼と脳機能 -たべることが脳にもたらす変化-

○長谷川 陽子（新潟大学大学院医歯学総合研究科包括歯科補綴学分野）

[SY09-Discussion] 総合討論

シンポジウム | シンポジウム | [シンポジウム10] 在宅歯科医療シンポジウム：機能改善を望めない高齢患者の歯科診療指針策定のためのケーススタディ
シンポジウム10

在宅歯科医療シンポジウム：機能改善を望めない高齢患者の歯科診療指針策定のためのケーススタディ

座長：佐藤 裕二（昭和大学歯学部高齢者歯科学講座 教授）、小玉 剛（日本歯科医師会 常務理事）

10:10 AM - 11:30 AM 第1会場（リ्यूとぴあ 2F コンサートホール）

[SY10-1] 機能改善を望めない高齢患者の歯科診療指針策定のためのケーススタディ

○花形 哲夫（花形歯科医院）

[SY10-2] 機能改善を望めない高齢患者の歯科診療指針策定のためのケーススタディ

○三木 次郎（三木歯科医院）

[SY10-3] 機能改善を望めない高齢患者の歯科診療指針策定のためのケーススタディ

○菊谷 武（日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリニック）

[SY10-4] 機能改善を望めない高齢患者の歯科診療指針策定のためのケーススタディ

○猪原 光（猪原歯科・リハビリテーション科）

[SY10-Discussion] 総合討論

シンポジウム | シンポジウム | [シンポジウム11] 病院歯科シンポジウム：高齢者を支える病院歯科の普及について語り合おう！

シンポジウム11

病院歯科シンポジウム：高齢者を支える病院歯科の普及について語り合おう！

座長：大野 友久（浜松市リハビリテーション病院歯科 部長）

2:10 PM - 4:00 PM 第1会場（リ्यूとぴあ 2F コンサートホール）

[SY11-1] 市中病院と関連施設での病院歯科の展開

○岩佐 康行（原土井病院歯科／摂食・栄養支援部）

[SY11-2] 大学病院と市中病院での病院歯科の展開

○曾我 賢彦（岡山大学病院 医療支援歯科治療部）

[SY11-3] 市中病院と地域における病院歯科活動

○長谷 剛志（公立能登総合病院 歯科口腔外科）

[SY11-4] 医学部歯科口腔外科での病院歯科活動

○岡本 美英子（藤田医科大学 医学部 歯科・口腔外科学講座）

[SY11-5] 市中病院で医師から求められる歯科医師になるために

○松村 香織（公立八女総合病院 歯科口腔外科）

[SY11-Discussion] 総合討論

第2会場

シンポジウム | シンポジウム | [シンポジウム12] 支部・地域保健医療福祉シンポジウム：地域包括ケアにおける高齢者栄養支援に歯科はどうかかわるか？

シンポジウム12

支部・地域保健医療福祉シンポジウム：地域包括ケアにおける高齢者栄養支援に歯科はどうかかわるか？

座長：平野 浩彦（東京都健康長寿医療センター 歯科口腔外科部長／研究所研究部長）、糸田 昌隆（大阪歯科大学附属病院口腔リハビリテーション科／医療保健学部 教授）

9:40 AM - 11:30 AM 第2会場（リ्यूとぴあ 5F 能楽堂）

[SY12-1] 「口腔保健センターと栄養ケアステーションとの連携」

○高田 靖（公益社団法人 東京都豊島区歯科医師会）

[SY12-2] 美味しいを地域で支えよう！「くりやま健口になっちゃうかい！？」の取り組み

○真井 睦子（日本赤十字社 栗山赤十字病院 医療技術部栄養課）

[SY12-3] 地域高齢者の低栄養を防止せよ！～歯科からはじまる"社会的処方"と"通いの場"へのかかわり方～

○丸岡 三紗（まんのう町国民健康保険造田歯科診療所）

[SY12-Discussion] 総合討論

シンポジウム | シンポジウム | [シンポジウム13] 歯科衛生士シンポジウム：歯科衛生士のリサーチマインド ～高齢者への根拠ある口腔健康管理の実践を目指して～

シンポジウム13

歯科衛生士シンポジウム：歯科衛生士のリサーチマインド ～高齢者への根拠ある口腔健康管理の実践を目指して～

座長：伊藤 加代子（新潟大学医歯学総合病院口腔リハビリテーション科 病院講師）、森下 志穂（明海大学保健医療学部口腔保健学科 助教）

2:10 PM - 4:00 PM 第2会場（りゅーとびあ 5F 能楽堂）

[SY13-1] エビデンスを活用する側から創出・発信する立場
へー歯科衛生士が研究に取り組むためにー

○小原 由紀（東京都健康長寿医療センター研究所 自立促進と精神保健研究チーム）

[SY13-2] リサーチマインドを持つ歯科衛生士を目指して

○末永 智美（1. 北海道医療大学病院、2. 北海道医療大学在宅歯科診療所）

[SY13-3] 歯科衛生研究が「伝わる」一言になる！地域での実践例

○三好 早苗（広島大学大学院医系科学研究科 公衆口腔保健学研究室）

[SY13-4] 私が目指す研究との向き合い方一気づき、学び、そしてつながりー

○中山 良子（岡山市立市民病院 診療技術部 リハビリテーション技術科）

[SY13-Discussion] 総合討論

シンポジウム | シンポジウム | [シンポジウム9] スポンサーシンポジウム：咀嚼研究の最新像

シンポジウム9

スポンサーシンポジウム：咀嚼研究の最新像

座長：井上 誠（新潟大学大学院医歯学総合研究科摂食嚥下リハビリテーション学分野 教授）、山村 健介（新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔生理学分野 教授）

Sun. Jun 12, 2022 9:00 AM - 10:00 AM 第1会場（りゅーとびあ 2F コンサートホール）

共催：株式会社ロッテ

＊専門医申請者研修

【シンポジウム趣旨】

咀嚼は、動物が生きていくために欠かせない摂食機能の中でも重要な役割を果たしています。このような観点から、近年、咀嚼を口腔機能にとどめず、全身の健康や脳機能、嚥下機能との関連を焦点としたトランスレーショナルな研究が行われてきています。本シンポジウムでは、口腔生理学、摂食嚥下リハビリテーション学、歯科補綴学、高齢者歯科学といった多角的な視点で咀嚼機能に関わる研究内容をレビューし、3名の先生方から咀嚼と全身との関連を、最新の研究結果とともにわかりやすくご講演いただきます。

【このシンポジウムに参加すると】

- 咀嚼機能と全身との関連を理解することができる。
- 口腔生理学、摂食嚥下リハビリテーション学、歯科補綴学、高齢者歯科学といった多角的な視点から咀嚼機能を考えることができる。
- 咀嚼機能の評価、維持向上の重要性を理解することができる。

【井上 誠先生 略歴】

1994年3月 新潟大学歯学部 卒業
1994年4月 新潟大学歯学部 第一口腔外科学講座入局
1998年3月 新潟大学大学院歯学研究科 修了（歯学博士）
1998年4月 新潟大学歯学部 口腔生理学講座 助手
1999年12月～2001年11月 英国レスター大学留学
2004年9月 新潟大学医歯学総合病院 摂食嚥下機能回復部 講師
2006年10月 新潟大学大学院医歯学総合研究科 摂食嚥下リハビリテーション学分野 助教授
2008年4月 同 教授 現在に至る

（学会活動）

日本摂食嚥下リハビリテーション学会 副理事長
日本口腔リハビリテーション学会 理事
日本顎口腔機能学会 常任理事

【山村 健介先生 略歴】

昭和59年3月 静岡県立藤枝東高等学校卒業
昭和59年4月 新潟大学歯学部歯学科入学
平成2年3月 新潟大学歯学部歯学科卒業
平成6年3月 新潟大学大学院歯学研究科修了（口腔生理学専攻）
平成7年4月 新潟大学助手 歯学部口腔生理学講座
平成9年8月 カナダ・トロント大学歯学部 Post Doctoral Fellow（～平成11年8月）
平成12年12月 カナダ・トロント大学歯学部 文部科学省在外研究員（短期）（～平成13年2月）
平成18年6月 新潟大学助教授 医歯学系摂食環境制御学講座口腔生理学分野（～平成21年3月）
平成21年4月 新潟大学教授 医歯学系摂食環境制御学講座口腔生理学分野（現在に至る）

- [SY9-1] 咀嚼嚥下のプロセスを生体記録と食塊物性から評価する
○真柄 仁（新潟大学 医歯学総合病院 摂食嚥下機能回復部）
- [SY9-2] 咀嚼能力と全身健康 -咀嚼チェックガムを用いた咀嚼能力評価-
○濱 洋平（東京医科歯科大学 高齢者歯科学分野）
- [SY9-3] 「咀嚼と脳機能 -たべることが脳にもたらす変化-」
○長谷川 陽子（新潟大学大学院医歯学総合研究科包括歯科補綴学分野）
- [SY09-Discussion] 総合討論

(Sun. Jun 12, 2022 9:00 AM - 10:00 AM 第1会場)

[SY9-1] 咀嚼嚥下のプロセスを生体記録と食塊物性から評価する

○真柄 仁 (新潟大学 医歯学総合病院 摂食嚥下機能回復部)

【略歴】

2012年3月 新潟大学 大学院 医歯学総合研究科 修了 (歯学博士)

2012年4月～2015年3月 新潟大学 医歯学総合病院 摂食嚥下機能回復部 助教

2014年6月～2015年5月 University of Manchester, Research fellow

2015年4月～現在 新潟大学 医歯学総合病院 摂食嚥下機能回復部 講師

【所属学会】

日本摂食嚥下リハビリテーション学会 (評議員, 認定士)

日本顎口腔機能学会 (評議員)

日本補綴歯科学会 (専門医)

European Society for Swallowing Disorders

他

【研究者情報URL】

<https://researchmap.jp/jin-m>

【抄録】

咀嚼は固形食品を適切に摂取するために必要不可欠な過程である。食品を咀嚼、嚥下する際には、歯と咀嚼筋の作用による食品の咬断、粉碎に加えて、舌、口唇、頬といった軟組織を含む顎口腔領域の機能が調和することによって成される食塊形成や移送過程が必須である。食塊形成時には、粉碎された食品が唾液と混和されることにより、その過程で刻々と変化する食塊の大きさ、温度、物性などから得られる感覚情報が処理され、咀嚼運動のパターンが変化していると考えられる。この運動基本パターンは主に脳幹に存在するCPGによって制御されているが、咀嚼運動の誘発や変調は、高次脳を司る大脳皮質をも介した感覚と運動の統合機能によって巧みに調整されている。

これまでに、咀嚼による食品の粉碎に伴う筋活動様式や顎運動の変化を筋電図や動作解析の手法を用いて評価している研究がいくつか存在する。一方で、咀嚼から嚥下に至る過程で形成される食塊自体は直接可視化できないため、画像評価手法を併用する必要がある。嚥下造影検査を用いて、咀嚼中の食塊形成と移送に関わる舌運動や口腔顔面運動が評価されている。舌は顎舌骨筋を介して舌骨に、顎二腹筋等の咀嚼関連の筋も舌骨に付しており、舌の位置の保持や運動には舌骨上筋の活動の寄与が大きい。当分野では、舌骨上筋の筋電図と顎運動を同時記録することで、咀嚼時の食塊形成や移送に対する舌骨上筋活動の寄与について定量評価を試みている。

一方で、嚥下をプロセスの終点とした場合、咀嚼運動は嚥下するために有利な食塊を形成している過程と考えることもできる。過去には、嚥下するために適した絶対的な食塊物性、すなわち食塊の嚥下閾値が存在すると報告されてきた。固形食品の摂取を考えた場合、咬断、粉碎し、嚥下しやすい食塊物性を咀嚼することで得ている事実に近い余地はない。しかしながら、同一食品を誰もが同様に摂取しているわけではなく、咀嚼様式に個人差が認められることは日常生活においても経験されることである。近年、当分野で行った咀嚼、嚥下運動の記録と咀嚼された食塊物性評価では、誰もが同じ食塊物性で嚥下しているわけではないことが示されている。

本セッションの前段では、咀嚼から嚥下過程における食塊形成や移送のプロセスを筋電図や顎運動の生体記録から読み解く試みを、後段では得られた食塊物性の測定から見える摂取様式の個人差や、その個人差の要因として考えられる口腔機能との関連についていくつかのデータをお示するとともに、今後の咀嚼嚥下に関わる研究の展望を考察する。

(Sun. Jun 12, 2022 9:00 AM - 10:00 AM 第1会場)

[SY9-2] 咀嚼能力と全身健康 -咀嚼チェックガムを用いた咀嚼能力評価-

○濱 洋平 (東京医科歯科大学 高齢者歯科学分野)

【略歴】

2013年 東京医科歯科大学 大学院医歯学総合研究科 博士課程修了 博士(歯学)
2014年 東京医科歯科大学 大学院医歯学総合研究科 高齢者歯科学分野 特任助教
2019年 東京医科歯科大学 大学院医歯学総合研究科 高齢者歯科学分野 助教(現職)

【抄録】

超高齢社会を迎えた我が国において、要介護高齢者の増加は解決しなければならない喫緊の課題の1つである。要介護となることで高齢者個人やその家族などの生活が制限されることはもちろんのこと、医療・福祉など社会補償費の増大を招き、その結果国力の低下を惹起することにもなる。介護予防を達するためには多領域からのアプローチが必須であるが、近年、歯科領域からの対応として口腔機能低下症・オーラルフレイルの概念が知られるようになった。その中でも咀嚼は主要な口腔機能の1つであり、咀嚼能力が健康・要介護関連因子と関連があることが報告されている。そのような状況の中、咀嚼能力の改善と言った歯科領域からのアプローチで介護予防を図ることが、社会的にも大きな注目を集めるようになり、簡便かつ効果的な咀嚼能力評価法が必要とされるようになった。その咀嚼能力を評価する1つのツールとして「キシリトール咀嚼チェックガム[®]」がよく用いられている。

咀嚼チェックガムは株式会社ロッテと東京医科歯科大学 高齢者歯科学分野(旧、全部床義歯補綴学分野)において共同開発された、咀嚼能力を評価するためのチューインガムである。「誰でも」、「誰にでも」使用可能であることをコンセプトとしており、多くのシチュエーションにおいて簡便かつ効果的に利用される。咀嚼前は緑色であるが、咀嚼の進行と共にその色は赤色へと変わっていき、その咀嚼前後の色変わりの程度を判定することで、咀嚼能力を数値化することが可能である。未就学児から健常成人、さらには全部床義歯装着者にも適用できることが報告されている。その用途は多岐に及び、研究、臨床はもちろんのこと、ご自身や家族、また保育施設などにおける健康チェックツールとしての利用や、咀嚼の重要性を啓発するイベントに利用することもできる。

本シンポジウムでは限られた時間ではあるが、咀嚼チェックガムを中心とした咀嚼能力評価と全身健康の関連について紹介させて頂く予定である。まず様々な咀嚼能力評価法について概観したのち、歯の欠損また欠損補綴による咀嚼能力への影響について、簡単に研究を紹介する。その後、咀嚼チェックガムに関するこれまでの研究とその応用について紹介する。まず、咀嚼チェックガム自体を対象とした研究のレビューを行いながら、その開発の経緯、歴史を振り返り、咀嚼チェックガム使用法、注意点について整理する。さらに咀嚼チェックガムにより評価された咀嚼能力と健康、介護予防との関連について、現在分かっていることをまとめさせて頂く。

本シンポジウムが咀嚼能力評価から健康、介護予防へと連なる一助となれば幸いである。

(Sun. Jun 12, 2022 9:00 AM - 10:00 AM 第1会場)

[SY9-3] 「咀嚼と脳機能 -たべることが脳にもたらす変化-

○長谷川 陽子 (新潟大学大学院医歯学総合研究科包括歯科補綴学分野)

【研究者情報URL】

<https://researchmap.jp/read0076445>

【略歴】

2001年 九州歯科大学歯学部卒業
2001年 大阪大学大学院歯学研究科 博士課程
2006年 大阪大学歯学部附属病院 咀嚼補綴科 医員
2010年 兵庫医科大学歯科口腔外科学講座 助教
2012年 モントリオール大学 客員研究員

2014年 兵庫医科大学歯科口腔外科学講座 講師

2017年 新潟大学大学院医歯学総合研究科 講師 現在に至る

【関連文献】

1. Influence of human jaw movement on cerebral blood flow. *J Dent Res.* 86, 64-68, 2007.
2. Effects of unilateral jaw clenching on cerebral/systemic circulation and related autonomic nerve activity. *Physiol. Behav.* 105, 292-297 2012.
3. Flavor-Enhanced Modulation of Cerebral Blood Flow during Gum Chewing. *PLoS ONE* 8, 2013.
4. Influence of Sourness on Higher Brain Functions. *J Nutri Food Sci*, 2017.

【抄録】

咀嚼とは、咀嚼筋をはじめとする顎筋・舌・顔面のリズムカルな運動であり、その運動は半随意的に食塊の物理的性状の変化に対応して最適な顎運動パターンをとる反射的要素の強い運動といえます。顎運動や咀嚼運動といった半随意運動の制御に関わる部位だけでなく認知機能との関連も深い大脳皮質では、咀嚼時には活動筋が収縮と弛緩を繰り返す等張性収縮（動的収縮）により筋血流量は増し、さらに食品の味・香り・食感などの刺激が相乗効果となり、咀嚼をコントロールする脳神経活動が賦活化し、脳血流量が増加する事が知られています。脳神経細胞のエネルギー源は糖のみのため、神経活動の亢進に伴い局所血流量が増加します。その原理を利用して、PETやf-MRIなどの脳機能イメージング技術が進歩してきました。咀嚼運動は頭頸部が動くだけでなく、筋活動や唾液分泌などを伴うため脳機能イメージングにとっては不利ですが、これまで様々な試みがされました。その大きな理由が、咀嚼は「毎日する運動だから。誰でもする運動だから。」でしょう。

歩行やトレーニングなど運動習慣の定着・継続が認知機能(≒高次脳機能)の改善に効果的であることは、近年の報告から知られています。例えば歩行運動は、運動に伴う脳への求心性情報増加だけでなく、骨格筋での代謝亢進や、交換神経活動は亢進に伴う全身の血流増加をもたらしますが、脳血流も脳神経活動の亢進に伴って増加します。一方で、運動習慣は働く世代は「面倒だから」定着せず、高齢者になると生活習慣が変えられないだけでなく運動機能の低下のために、定着しにくいことが知られています。そこで、いつもより「よく噛む」だけで他の運動と同様の効果が得られるのであれば、間違い無く「咀嚼」は高齢者にとって素晴らしい運動と言えるでしょう。

本セッションでは、咀嚼と脳との関連について、ヒトを対象とした研究を紹介し、咀嚼の運動としての可能性を概説します。また、高齢者における咀嚼と認知機能との関連性について、最近の研究から得られたエビデンスを紹介し、高次脳機能にとって良い食事とは何かを考察します。また、我々が行っている脳機能イメージング研究から得た知見を紹介し、咀嚼習慣の定着と認知機能との関連性についてエビデンスと共にセッションに参加される皆様とディスカッション出来ればと思います。

(Sun. Jun 12, 2022 9:00 AM - 10:00 AM 第1会場)

[SY09-Discussion] 総合討論

シンポジウム | シンポジウム | [シンポジウム10] 在宅歯科医療シンポジウム：機能改善を望めない高齢患者の歯科診療指針策定のためのケーススタディ

シンポジウム10

在宅歯科医療シンポジウム：機能改善を望めない高齢患者の歯科診療指針策定のためのケーススタディ

座長：佐藤 裕二（昭和大学歯学部高齢者歯科学講座 教授）、小玉 剛（日本歯科医師会 常務理事）

Sun. Jun 12, 2022 10:10 AM - 11:30 AM 第1会場（りゅーとぴあ 2F コンサートホール）

企画：在宅歯科医療委員会

＊認定制度指定研修

【シンポジウム趣旨】

従来は、歯科疾患の予防や咬合の維持、再構築は口腔機能を支え、QOLの維持や、生命予後をも延伸させると考えてきた。しかし、生命予後がある程度確定した時期においては、上記の取り組みは、意味を持たず、歯科疾患の発症をある程度受け入れざるを得ない時期が訪れる。また、歯科疾患が口腔機能や全身状態に重大な影響をしないうちに生命が尽きることが予想される場合には、歯科治療をしないことや、咬合の再構成をしないこともある。このような、機能改善を望めない時期に対する、歯科診療のガイドラインは存在しないが、諸家によって意見も分かれることと思われる。本シンポジウムでは、経験の豊富な4名の講師から、活動の経験をお話しいただいた上で、具体的なケースに関して、総合討論を行い、「機能改善を望めない高齢患者の歯科診療指針策定」につなげたいと思う。

【このシンポジウムに参加すると】

- 1) 人生の最終段階における口腔内の状態を知る
- 2) 機能改善を望めない高齢患者に対する歯科医療の目標を考える

【佐藤 裕二先生 略歴】

1982年：広島大学歯学部卒業
1986年：広島大学大学院（歯科補綴学1）修了・歯学博士
1986年：歯学部附属病院助手
1988年～1989年：アメリカ合衆国NIST客員研究員
1990年：広島大学歯学部講師（歯科補綴学第一講座）
1994年：広島大学歯学部助教授
2002年：昭和大学歯学部教授（高齢者歯科学）
日本老年歯科医学会 前理事長，専門医・指導医，理事（在宅歯科医療）
日本補綴歯科学会，日本口腔インプラント学会，日本顎関節学会 専門医・指導医
第一種歯科感染管理者
昭和大学歯科病院ジェネラルリスクマネージャ

【小玉 剛先生 略歴】

昭和58年3月 城西歯科大学（現・明海大学）歯学部 卒業
昭和60年3月 東京医科歯科大学歯学部専攻生 修了（口腔外科学）
昭和60年6月 こだま歯科医院 開設
平成元年3月 東京医科歯科大学大学院歯学研究科修了（歯科理工学）歯学博士
平成3年4月～平成23年3月 東京医科歯科大学歯学部附属歯科技工士学校講師（非常勤）
平成5年4月～平成9年3月 東京医科歯科大学歯学部講師（非常勤・第二理工学教室）
平成17年4月～平成28年3月 明治薬科大学 客員教授
平成25年6月～平成29年6月 一般社団法人 東京都東久留米市歯科医師会 会長
平成28年3月～ 公益社団法人 日本歯科医師会 常務理事

平成28年3月～令和3年6月 公益財団法人 8020推進財団 常務理事

令和3年6月～ 公益財団法人 8020推進財団 専務理事

現在

東京都東久留米市立第六小学校 学校医（歯科）

東京学芸大学附属高等学校 学校医（歯科）

社会歯科学会 副理事長

日本老年歯科医学会 在宅歯科医療問題検討委員会副委員長

-
- [SY10-1] 機能改善を望めない高齢患者の歯科診療指針策定のためのケーススタディ
○花形 哲夫（花形歯科医院）
- [SY10-2] 機能改善を望めない高齢患者の歯科診療指針策定のためのケーススタディ
○三木 次郎（三木歯科医院）
- [SY10-3] 機能改善を望めない高齢患者の歯科診療指針策定のためのケーススタディ
○菊谷 武（日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリニック）
- [SY10-4] 機能改善を望めない高齢患者の歯科診療指針策定のためのケーススタディ
○猪原 光（猪原歯科・リハビリテーション科）
- [SY10-Discussion] 総合討論

(Sun. Jun 12, 2022 10:10 AM - 11:30 AM 第1会場)

[SY10-1] 機能改善を望めない高齢患者の歯科診療指針策定のためのケース スタディ

○花形 哲夫（花形歯科医院）

【略歴】

1981年 神奈川歯科大学卒業
1988年 歯学博士学位修得、神奈川歯科大学非常勤講師
2010年 公益財団法人勇美記念財団「在宅医療推進のための会」委員
2011年 山梨県立大学 緩和ケア・認知症認定看護師教育課程講師、
山梨県立大学大学院看護学研究科 在宅看護学特論講師
2012年 日本歯科医師会地域保健委員
2013年 日本歯科大学口腔リハビリテーション科 臨床准教授
現在に至る

【所属学会】

日本老年歯科医学会 専門医指導医・摂食専門医指導医
日本摂食嚥下リハビリテーション学会 認定士
日本口腔ケア学会 指導医等

【抄録】

歯科訪問診療を行い30年になる。きっかけは、近隣のリハビリテーション病院の看護師長からの入院患者の義歯の調整依頼であった。同病院を訪問すると何人かの入院患者から同様の歯科治療の依頼があった。ここはまさに「無歯科医村」であった。当初は義歯に関わる治療が中心で、口腔健康管理までは出来なかった。

多くの先生方・多職種の関係者の方々から学び、現在は年齢を問わず歯科訪問診療を行うなか口腔衛生管理を前提に、「如何に口から食べる力を育て、口腔機能の低下予防・回復・維持の手伝いが患者と家族も含め介護・医療に関わる方々を対象に出来るか。」を考えている。

本シンポジウムの課題である「歯科訪問診療の人生の最終段階を迎えつつある人の関わり」は、以下の二点を考え対応している。

- 1、医療の視点からは、安全性の維持の為に、窒息・誤嚥、誤嚥性肺炎等への対応。
 - 2、生活の視点からは、食べる人の尊厳を重視して、最期まで食べたいものを味わっていただくこと。
- その為には、多職種連携・協働は不可欠であり、さらに限られた時間の中で、情報の共有の一助として ICTの活用は、有効だと考える。

(Sun. Jun 12, 2022 10:10 AM - 11:30 AM 第1会場)

[SY10-2] 機能改善を望めない高齢患者の歯科診療指針策定のためのケース スタディ

○三木 次郎（三木歯科医院）

【略歴】

日本大学理工学部卒
日本大学松戸歯学部卒
自治医科大学歯科口腔外科ジュニアレジデント
三木歯科医院院長（現）
介護支援専門員
結城市歯科医師会長

日本在宅ケアアライアンス理事（現）

全国在宅療養支援歯科診療所連絡会 HDC 会長（現）

【抄録】

最期まで口から食べることは人の尊厳と言われている。終末期における口腔機能管理、口腔衛生管理によって最期まで口から食べられる機能を維持することは、我々歯科の目標の一つでもある。

口腔摂取は乳・幼児期からの当たり前の行為で、誰でも最期まで口腔摂取できるものと思いきがちである。家族が最期まで口から食べさせたいと希望することもよく理解できるし、本人も健康な時は、みなそう望んでいる。しかし、口腔の機能改善が望めない場合や基礎疾患の種類や病状によっては口腔摂取を諦めなければならないこともある。

高齢になるに伴い口腔の機能的・器質的問題、認知症など精神的な問題、神経難病など、進行性・不可逆性の疾患の問題などが顕在化してくる。このような場面で歯科はどのように、そしてどこまで対応できるのだろうか。

今回、歯科的な立場からの人生の最終段階における歯科医療・歯科的なケアのかかわりについて考えてみたい。

(Sun. Jun 12, 2022 10:10 AM - 11:30 AM 第1会場)

[SY10-3] 機能改善を望めない高齢患者の歯科診療指針策定のためのケーススタディ

○菊谷 武（日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリニック）

【略歴】

1988年 日本歯科大学歯学部卒業

2001年10月より 附属病院 口腔介護・リハビリテーションセンター センター長

2005年4月より助教授

2010年4月 教授

2012年1月 東京医科大学兼任教授

2012年10月 口腔リハビリテーション多摩クリニック 院長

【抄録】

大学附属のクリニックである当院は、地域包括ケアシステムにおける歯科の在り方を模索し、それを歯学部生、臨床研修歯科医師に伝える目的で10年前に開院した。現在は、月に約400件の訪問診療を行い、そのうち在宅診療は300件程度である。摂食嚥下障害を有する患者への関りが多く、自ずと人生の最終段階に向かっている患者が多くいる。訪問診療で初診を受けた患者の約半数は1年以内に死亡している。また、がん患者の在宅看取りケースに多く介入しており、1年間に40ケースほど看取りに立ち会い、医師、訪問看護師などとデスカンファを通じ課題抽出、振り返りを行っている。

(Sun. Jun 12, 2022 10:10 AM - 11:30 AM 第1会場)

[SY10-4] 機能改善を望めない高齢患者の歯科診療指針策定のためのケーススタディ

○猪原 光（猪原歯科・リハビリテーション科）

【略歴】

2000年 東京都立大学工学部応用化学科 卒業

2005年 東京医科歯科大学歯学部歯学科 学士編入学・同卒業

2006-10年 国立感染症研究所 細菌第一部 口腔細菌感染症室 研究員

2009年 東京医科歯科大学大学院 高齢者歯科学分野修了（博士(歯学)）

2010年 東京都立多摩総合医療センター 精神科研修生

2010-11年 カナダ・エドモントン市 ミザリコーディア・コミュニティ病院 摂食嚥下分野留学

2011年 医療法人社団敬崇会 猪原歯科・リハビリテーション科 訪問診療部部長

2021年 グロービス経営大学院 経営研究科 在学中

現在、東京医科歯科大学歯学部口腔保健学科、九州歯科大学歯学部口腔保健学科 非常勤講師

【抄録】

当院は約70年前に開業した広島県福山市にある歯科主導型の医科歯科併設診療所であり、スタッフ総数45名である。1990年より歯科訪問診療を開始し、当初は主に在宅と精神科病院への訪問を行っていた。2011年に演者が赴任し、訪問診療部を立ち上げ、摂食嚥下リハビリテーションも開始した。また2015年には近隣の脳神経センター大田記念病院において歯科開設に協力し、脳卒中や神経難病の退院患者も多く担当している。直近では、月平均436件の訪問診療を実施し、訪問先における患者宅と施設の割合は、1：3となっている。

当院が担当している在宅患者の多くは、在宅主治医からの紹介であり、看取りまでを見据えた依頼であることが多い。特に終末期は、口腔乾燥やカンジダ症など、口腔にトラブルが発生することも多く歯科介入が重要である。人生の完成期とも言える大切な時期に関わらせて頂けることは、自身も含めたスタッフの大きなやりがいにつながっている。

(Sun. Jun 12, 2022 10:10 AM - 11:30 AM 第1会場)

[SY10-Discussion] 総合討論

シンポジウム | シンポジウム | [シンポジウム11] 病院歯科シンポジウム：高齢者を支える病院歯科の普及について語り合おう！

シンポジウム11

病院歯科シンポジウム：高齢者を支える病院歯科の普及について語り合おう！

座長：大野 友久（浜松市リハビリテーション病院歯科 部長）

Sun. Jun 12, 2022 2:10 PM - 4:00 PM 第1会場（りゅーとびあ 2F コンサートホール）

企画：特任委員会（病院歯科）

＊認定制度指定研修

【シンポジウム趣旨】

高齢者に対応する病院歯科の普及について、ベテラン歯科医師と若手歯科医師でシンポジウムを行う。ベテランには、病院歯科という雇用を創出・拡充するために実践してきたこと、今後の展望・現在の問題点について提示していただき、若手には現在の病院歯科活動の実際と、病院歯科で勤務するのに必要な知識・技術について、病院歯科勤務希望の若手歯科医師の参考になるよう紹介いただく。これらの話を基に討論を実施し、現時点で病院歯科の普及を妨げていることや、今後の課題を明確化し、日本老年歯科医学会としての病院歯科に関するステートメントを作成したいと考えている。

【このシンポジウムに参加すると】

- 高齢者に対応する病院歯科について理解できる。
- 病院歯科における医科歯科連携・地域医療連携について理解できる。

【大野 友久先生 略歴】

1998年 東京医科歯科大学歯学部 卒業
1998年 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 入学
2001年 聖隷三方原病院リハビリテーション科歯科
2002年 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 卒業
2008年 聖隷三方原病院リハビリテーション科歯科 医長
2013年 聖隷三方原病院歯科 部長
2015年 国立長寿医療研究センター
2017年 国立長寿医療研究センター 室長
2019～年 浜松市リハビリテーション病院歯科 部長

日本老年歯科医学会 理事 指導医 専門医 認定医 摂食機能療法専門歯科医師

日本摂食嚥下リハビリテーション学会 代議員 認定士

- [SY11-1] 市中病院と関連施設での病院歯科の展開
○岩佐 康行（原土井病院歯科／摂食・栄養支援部）
- [SY11-2] 大学病院と市中病院での病院歯科の展開
○曾我 賢彦（岡山大学病院 医療支援歯科治療部）
- [SY11-3] 市中病院と地域における病院歯科活動
○長谷 剛志（公立能登総合病院 歯科口腔外科）
- [SY11-4] 医学部歯科口腔外科での病院歯科活動
○岡本 美英子（藤田医科大学 医学部 歯科・口腔外科学講座）
- [SY11-5] 市中病院で医師から求められる歯科医師になるために
○松村 香織（公立八女総合病院 歯科口腔外科）
- [SY11-Discussion] 総合討論

(Sun. Jun 12, 2022 2:10 PM - 4:00 PM 第1会場)

[SY11-1] 市中病院と関連施設での病院歯科の展開

○岩佐 康行（原土井病院歯科／摂食・栄養支援部）

【略歴】

2000年 東京医科歯科大学大学院口腔老化制御学分野 修了

東京医科歯科大学歯学部附属病院高齢者歯科 医員

2001年 聖隷三方原病院 リハビリテーション科歯科を開設

原土井病院歯科 常勤医

2020年 原土井病院 副院長，歯科部長，摂食・栄養支援部部長を兼務

臨床教授 九州大学歯学部（高齢者歯科・全身管理歯科）

非常勤講師 東京医科歯科大学（歯学部口腔保健学科）

九州大学（高齢者歯科・全身管理歯科/ 医学部保健学科）

九州歯科大学（総合診療学分野）

博多メディカル専門学校（歯科衛生士科）

【抄録】

当科は1998年に非常勤歯科医師と常勤歯科衛生士2名の体制で開設された。目的は療養病床に長期入院している高齢患者の口腔健康管理で、外来診療は行っていなかった。演者は2001年から勤務しており、現在は歯科医師常勤3名，非常勤2名，歯科衛生士常勤6名の体制で、入院患者の他に70歳以上を対象とした高齢者歯科外来を行っている。また、2016年にグループの医療法人で歯科医院を開設し、歯科医師常勤2名，非常勤1名，歯科衛生士常勤4名の体制で、一般診療および関連施設等における訪問診療を行っている。さらに、2020年には介護医療院に歯科衛生士1名を常勤配置して、入所者の口腔衛生管理，およびミールラウンドを行っている。

これまでに医療提供体制は大きく変化してきたが、その変化に対応するために院内で様々な課題が生じた。当科は、それらの課題の中で自らが対応可能なものについて、率先して取り組んできた。すなわち、摂食嚥下リハビリテーションとVFの開始（2001年），VEの開始（2003年），栄養サポートチームの立ち上げ（2005年）などである。現在、これらは当たり前に行われているが、当時は歯科が関与することに対する医科からの否定的な意見もあった。しかし、患者のために医科歯科で連携するという姿勢と、実績を着実に積み上げてきたことにより、現状に至ることができたと考えている。

現在は、上述した関連施設における訪問診療や歯科衛生士の配置などを進めている。この場合、歯科訪問診療料などの算定に制限があるため、収益という点では当科にメリットは少ない。しかし、当科のノウハウを施設において発揮することは、施設や入居者にとって有意義である。また、施設と良好な関係を築くことで、学生実習や歯科臨床研修および研究等に協力いただいており、結果として歯科医療の発展に寄与できていると考える。今後は収益性についても検討し、地域包括ケアシステムにおける医療・介護連携や多職種連携に歯科が参加することに繋げていきたい。

将来の展望では、外来における有病高齢者や認知症高齢者の歯科診療充実と、地域包括ケア病棟を活用した入院下での歯科診療や摂食嚥下リハビリテーションを計画している。地域における人口構成および医療提供体制の変化，それに伴う病院や関連施設の変化などを読み取って、歯科として何ができるのかを考えて対応していきたい。また、そのためには人材の確保が課題となるが、これは当科に限らず歯科全体の課題となるように思う。当科では市内の急性期病院歯科口腔外科の研修医を受け入れているが、これをさらに発展させた形で、地域で異なる機能をもつ複数の病院歯科・歯科口腔外科が連携して人材を育成することが有効であるように思う。

(Sun. Jun 12, 2022 2:10 PM - 4:00 PM 第1会場)

[SY11-2] 大学病院と市中病院での病院歯科の展開

○曾我 賢彦（岡山大学病院 医療支援歯科治療部）

【略歴】

1998年 岡山大学歯学部卒業
2002年 岡山大学大学院歯学研究科 修了 博士（歯学）
2002年 岡山大学歯学部附属病院 医員（第二保存科）
2003年 国立療養所邑久光明園(おくこうみょうえん) 厚生労働技官 歯科医師
2007年 国立療養所邑久光明園 厚生労働技官 歯科医長
2008年 岡山大学医学部・歯学部附属病院（現 岡山大学病院） 歯周科 助教
2008年 岡山大学医学部・歯学部附属病院（現 岡山大学病院）
周術期管理センター歯科部門 部門長 兼任（～2010年）
2010年 日本学術振興会特定国派遣研究者（オランダ）
（ライデン大学メディカルセンター，Academic Centre for Dentistry in Amsterdam）
2011年 岡山大学病院 中央診療施設 医療支援歯科治療部 副部長・助教
2013年 岡山大学病院 中央診療施設 医療支援歯科治療部 副部長・准教授
2017年 岡山大学病院 中央診療施設 医療支援歯科治療部 部長・准教授
現在に至る

【抄録】

私は、縁あって、歯周病の教室で研鑽を積んだ歯科医師の駆け出しの頃から、岡山大学病院における医科歯科連携の仕事に関わっています。医科歯科連携に特化した中央診療施設（医療支援歯科治療部）が設置された2011年以降は、この治療部の実務を統括する立場として、病院医療の質を歯科の専門性でより良くするための仕事をしています。

対象疾患はがんが多く、手術療法や化学療法等を受ける患者の口腔管理を積極的に行っています。また、心臓血管外科の患者の口腔管理も多く行っています。医療の進歩とともに高齢者にも適応できる治療が増え、私たちが対応する患者の高齢化も著しくなっています。延伸した寿命における生活の質がより良いものとなるよう、あるいは口腔が生活の質を低下させる原因とならないよう、必要な口腔管理を、地域の歯科医療機関の協力も得ながら行っています。

病院における医科歯科連携は極めて重要なはずですが、実際に歯科を設置している病院は約2割で、病院に従事している歯科医師は全体の約3%と少ない状況です〔厚生労働省第5回歯科医師の資質向上等に関する検討会資料（2017）より〕。医科歯科連携をさらに進める観点から、病院に歯科医師の配置を進めていく議論があり、前述の検討会が示した「歯科保健医療ビジョン」でも提言されていますが、5年経った現在、目立った進捗は見られません。

この原因の一つは、病院歯科の経営的な困難さにあると思われます。一例となりますが、私は2019年から、縁あって、心臓血管外科を主とする高知市の近森病院（512床・高知県の急性期医療の拠点病院の一つ）でも、病院医療の質を向上させるための歯科の開設と運営のお手伝いをしています。加齢による心臓弁膜症（主として大動脈弁狭窄症）で慢性心不全を患う高齢者に対し、近年カテーテルによる心人工弁置換術を施行しており、90歳代の患者も多くおられます。心周術期の口腔管理は重要かつニーズが高いものです。しかし、現在の診療報酬で回収できるのは歯科医師の人件費のみ程度にとどまり、採算のとりようがありません。2012年に周術期等の口腔管理に対して診療報酬が新設されたのは画期的でしたが、在院日数が極めて短い超急性期病院ではほぼ管理料収入のみとなります。歯科に極めて理解がある副院長（心臓血管外科）は、私の顔を見るたびに、「君ら（の診療報酬）はほんとにかわいそうだ」とおっしゃるのが口癖のようになっています。

もう一つの原因として、人材育成体制が整っていないことも問題と思われます。学部教育における多くの科目で、その専門分野の観点から高齢者を支える歯科医療の重要性に触れられるようになりました。一方で、その医療提供の場について、地域のみならず、病院を想像できる学生や研修歯科医はまだ少ないように思われます。超高齢社会の病院医療を支える歯科医療者の重要性を理解できるような教育が必要と思われます。

大学病院と市中病院での病院歯科の展開について、私が経験し考えていることについて、具体例を示しながら、皆様の議論のお役に立てることができればと考えております。

(Sun. Jun 12, 2022 2:10 PM - 4:00 PM 第1会場)

[SY11-3] 市中病院と地域における病院歯科活動

○長谷 剛志 (公立能登総合病院 歯科口腔外科)

【略歴】

2001年：北海道医療大学 歯学部 卒業

2006年：金沢大学大学院 医学系研究科 修了 医学博士

2009年：公立能登総合病院 歯科口腔外科 医長

2015年：同 部長

金沢大学大学院医薬保健学総合研究科外科系医学領域顎顔面口腔外科学分野 非常勤講師

「食力の会」代表

【資格】

日本口腔外科学会 専門医

日本口腔科学会 認定医・指導医

日本老年歯科医学会 認定医・指導医・摂食機能療法専門歯科医師

【受賞歴】

2001年：デンツプライ賞

2006年：日本口腔腫瘍学会 学会賞

2007年：日本口腔科学会 優秀論文賞

2015年：全国国保地域医療学会 優秀研究賞

2019年：日本口腔科学会 学会賞 など

【特許】

特許 第6901724号 食事観察サポートソフト「い〜とみる」

【抄録】

市中の「病院歯科」と言えども、超急性期病院の口腔外科から慢性期・老人病院の歯科など診療内容や取り組みには様々な体系がみられ、それぞれ特徴的な役割を担っていると推察する。したがって、高齢者医療における「病院歯科」の方向性を一括りにして述べることは非常に難しいことを予め断っておく。

当院は、日本海に突き出た能登半島に位置する。県庁所在地の金沢市から北へ約70kmの七尾市に存在し、急性期病床（434床）を有した能登地域の中核病院である。能登地域は4市5町より構成され、面積は石川県の約半分を占めるが、人口は約20万人(石川県人口の約18%)、高齢化率は約40%の超少子超高齢過疎地域である。このような状況にある能登の地域医療の砦として県内に2つある救命救急センターの1つがあり、小児救急・精神科診療を含む能登全域の3次救急を担っている。また、能登地域の総合病院で唯一の「歯科口腔外科」を標榜しており、「地域歯科診療支援病院」として口腔疾患全般における病診連携を強化している。

昨今、人口構成の移り変わりとともに、当院に紹介される患者の年齢層にも変化がみられる。私が当院に赴任した2005年と直近2020年の年齢分布を調べた。すると、2005年の新規患者は50歳代をピークに以降減少傾向にあったが、2020年は50歳代と80歳代に二峰性を示しており、新規患者の総数も高齢者を中心に増加している。患者の年齢分布が変化した要因はいくつか考えられる。歯が残っている高齢者が増えたことにより加齢による歯性感染症が多くなっていること、生理的老化に伴う口腔廃用の一変化として（習慣性）顎関節脱臼が多いこと、骨吸収抑制薬を服用している高齢者が多く薬剤に関連した顎骨壊死が増えていること、心疾患や脳血管疾患を背景に抗凝固薬を服用している高齢者が多く、近在歯科開業医が抜歯等の観血的処置に対する術後出血を懸念するケースが増えていること、認知症により歯科治療の遂行が困難となるケースが増えていること、摂食嚥下

障害の高齢者が増えていることである。これらが「病院歯科」への紹介内容として増加傾向にあり、年齢分布の変化に影響していると考えられる。

一方、高齢入院患者の周術期等口腔機能管理や摂食嚥下診療に積極的に介入することで入院中のみならず退院後の口腔管理の継続と食支援の方向性について考えなければならない。「病院歯科」は入院時に医科より紹介された患者の口腔を診察することで、かかりつけ歯科医との連携が途切れてしまった患者のつなぎ役として重要である。また、高齢入院患者の中には口腔が放置された状態（歯科難民）である場合も多いため、入院中の口腔健康管理をきっかけに退院後は地域の歯科医院に紹介することも忘れてはいけない。さらに、医療と生活の両面で高齢者の摂食嚥下機能についても「病院歯科」は地域連携を組む必要があるだろう。

(Sun. Jun 12, 2022 2:10 PM - 4:00 PM 第1会場)

[SY11-4] 医学部歯科口腔外科での病院歯科活動

○岡本 美英子（藤田医科大学 医学部 歯科・口腔外科学講座）

【略歴】

2013年3月 朝日大学 歯学部 歯学科卒業

2013年4月～2014年3月 朝日大学歯学部付属病院 研修歯科医

2014年4月～2015年3月 藤田保健衛生大学病院（現 藤田医科大学病院） 研修歯科医

2015年4月～2017年3月 藤田保健衛生大学（現 藤田医科大学）医学部 歯科 助手

2017年4月～現在に至る 藤田医科大学 医学部 歯科・口腔外科学講座 助教

【所属学会】

日本老年歯科医学会 認定医

日本障害者歯科学会 認定医

日本摂食嚥下リハビリテーション学会 認定士

日本臨床栄養代謝学会

【抄録】

高齢者は、加齢変化に伴いさまざまな疾患にかかりやすくなる。大学病院は重症度・緊急度の高い疾患をもつ高齢者が入院する場合が多く、歯科疾患においても同様の対応が求められる。このため大学病院の歯科口腔外科には口腔外科疾患に対する中核病院としての役割があり、歯学部を併設しないすべての大学病院が口腔外科、歯科口腔外科を標榜し、日本口腔外科学会の認定施設となっていることもうなずける。一方で、このように多くの高齢者を診療しているにもかかわらず、日本老年歯科医学会の認定研修施設は慶応義塾大学病院、福岡大学病院、琉球大学病院と私たちの藤田医科大学病院の4施設のみである。

近年、これら重症度・緊急度の高い疾患に対する周術期の集約的管理の重要性が認められるようになり、歯科でも周術期口腔機能管理が診療報酬に導入されてから10年の年月が過ぎようとしている。さらに、2018年には周術期等口腔機能管理と改称され、手術症例のみならず放射線・化学療法さらには緩和ケアの患者へと対象も拡大されていくなか、大学病院や市中病院での歯科口腔外科の役割にも変化が生じてきている。

藤田医科大学では藤田医科大学病院、ばんだね病院、七栗記念病院、岡崎医療センターの4つの病院を擁している。ばんだね病院以外には歯科が併設されており、岡崎医療センターでは主として急性期、七栗記念病院では回復期と終末期、藤田医科大学病院では日本一の病床数を持っていることもあり、急性期を中心に回復期から終末期に至るまでのすべての患者に対応している。ここでは、疾患の急性期にある患者には、周術期にある入院患者の口腔に関する問題の早期発見と口腔由来の合併症の予防を中心として手術前に口腔内の感染源を除くことはもちろん、摂食嚥下リハやNSTなどのチーム医療に参画することで術後も食事を食べやすい口腔機能を目指した管理を行っている。回復期では、リハビリテーションの一環として口腔機能の維持・回復を目標としながらも、病状にあわせた生活期に管理しやすい口腔環境の構築を目指している。終末期では、口腔を由来とした苦痛の除去と食べる楽しみや話す楽しみを最後まで維持できる緩和ケアを行っている。

このように疾患の特性とその病期に合わせた歯科医療を行うためには、それぞれの疾患を理解し、その疾患に応じた生活や予後を見据えた口腔健康管理の目標を立てる必要がある。大学病院は、このような患者の予後を見据えた治療計画を立てるといった研修に最もふさわしい場所と思われるが、そのためには、口腔外科領域のみでなく周術期口腔機能管理に対して専門的に対応できること、それも口腔衛生を中心とした周術期等口腔機能管理ではなく、口腔機能低下に対するまさしく文字通りの周術期等口腔機能管理が出来ることが求められている。

本講演では、歯科部門と口腔外科部門に分かれてそれぞれ専門的な診療を行っている藤田医科大学病院歯科・口腔外科での私たちの活動を通じて、口腔外科だけではない病院歯科というこれからの歯科について考えてみたい。

(Sun. Jun 12, 2022 2:10 PM - 4:00 PM 第1会場)

[SY11-5] 市中病院で医師から求められる歯科医師になるために

○松村 香織（公立八女総合病院 歯科口腔外科）

【略歴】

2005年3月 九州大学歯学部 卒業
 2005年4月 九州大学病院第一口腔外科 研修医
 2011年3月 九州大学大学院歯学研究科修了 博士（歯学）取得
 2013年4月 九州大学病院救命救急センター 医員(出向)
 2016年4月 九州大学病院顎顔面口腔外科 助教
 2018年4月 公立八女総合病院歯科口腔外科 医長 現在に至る

日本口腔外科学会専門医 日本有病者歯科医療学会専門医 日本臨床栄養代謝学会認定歯科医師
 日本化学療法学会認定歯科医師 日本小児口腔外科学会指導医 日本顎関節学会暫定指導医
 日本摂食嚥下リハビリテーション学会認定士 日本抗加齢医学会専門医

【抄録】

病院歯科口腔外科においては歯科口腔外科疾患の治療、周術期口腔機能管理、地域歯科診療所の後方支援、有病者歯科医療、摂食嚥下リハビリテーションなど多岐にわたる診療が展開されている。地域性や各施設の人材により多少診療内容は異なるが、近年の高齢化の進行とともに地域歯科診療所のみならず医科からも病院歯科への期待や要望は高まっていると考えられる。周術期等口腔機能管理の保険収載以降、がん治療における口腔管理の重要性や医科歯科連携の必要性が広く周知されたことで、院内に歯科口腔外科を設置する病院はわずかではあるが増加している。

公立八女総合病院は福岡県の南部にある人口約13万人の八女筑後医療圏に位置する急性期病院である。医療圏の高齢化率は2020年の時点で35.6%とかなり高齢化が進んでいる地域であるが、当医療圏内には病院歯科口腔外科がなく、院内の医師に加えて地域の歯科医師会からも二次歯科診療機関としての歯科口腔外科設置のニーズがあったことから、2018年に歯科口腔外科が新設された。私は歯科口腔外科の立ち上げに携わる機会をいただき、現在は地域歯科診療支援病院として外来患者の口腔外科手術や院内他科と連携した周術期口腔機能管理などに対応している。

病院歯科口腔外科の重要な役割として、地域の歯科診療所と連携して行う歯科二次診療、院内医科との医科歯科連携がある。さらに、高齢者の増加とともに多くの基礎疾患に罹患し多数の薬剤を内服している有病高齢者に対し安全な歯科医療を提供するという社会的なニーズは高まっていることから、当院では口腔外科専門医の常勤に加え、複数の補綴治療専門医に非常勤で勤務してもらうことで口腔外科疾患の治療のみではなく歯科治療全般に対応し、入院中に集中的に歯科治療介入を実施し退院までにできるだけ口腔内の状態を整えてから地域に戻っていただくようにしている。院内医科との医科歯科連携においては、医科治療中の患者背景を理解した上で歯科としての治療プランを提供している。特に、周術期口腔機能管理においては、医科疾患の治療の流れを把握し、治療中に生じる口腔内有害事象に適切に対応する必要がある。また、栄養サポートチームや緩和ケアチーム

などのチーム医療においても歯科専門職が医学的な知識を持ってカンファレンスやラウンドに参加し、他のメディカルスタッフと共通の言語で討議を行うことで、チーム医療介入患者に対して適切な時期に必要な歯科治療や口腔ケアを提供できるようにしている。

本講演では、急性期病院歯科口腔外科の開設から数年間の発展過程、一般歯科診療所との地域連携および病院内での医科歯科連携の実情をご紹介したい。また、市中病院の歯科で勤務するにあたって求められるスキルや知識についても考察したい。

(Sun. Jun 12, 2022 2:10 PM - 4:00 PM 第1会場)

[SY11-Discussion] 総合討論

シンポジウム | シンポジウム | [シンポジウム12] 支部・地域保健医療福祉シンポジウム：地域包括ケアにおける高齢者栄養支援に歯科はどうかかわるか？

シンポジウム12

支部・地域保健医療福祉シンポジウム：地域包括ケアにおける高齢者栄養支援に歯科はどうかかわるか？

座長：平野 浩彦（東京都健康長寿医療センター 歯科口腔外科部長／研究所研究部長）、糸田 昌隆（大阪歯科大学 附属病院口腔リハビリテーション科／医療保健学部 教授）

Sun. Jun 12, 2022 9:40 AM - 11:30 AM 第2会場（りゅーとぴあ 5F 能楽堂）

企画：支部・地域保健医療福祉委員会

【シンポジウム趣旨】

2014年に医療介護総合確保推進法が整備され、その中で地域包括ケアシステム構築が謳われた。2025年を目途に、重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築が進められている。本システムは、保険者である市町村や都道府県が、地域の自主性や主体性に基づき、地域の特性に応じて作り上げていくことが求められている。本シンポジウムでは、高齢者栄養支援に関して歯科との連携が重要視される中、その体制づくりなどを「地域包括ケア」をキーワードに地域特性などを踏まえ情報交換する。

【このシンポジウムに参加すると】

- 地域包括ケアについて理解が深まる。
- 地域での高齢者栄養支援体制の在り方についての情報を得られる。
- 地域特性を活かした歯科と高齢者栄養支援との連携について学ぶことができる。

【平野 浩彦先生 略歴】

日本大学松戸歯学部卒業 医学博士

平成2年 東京都老人医療センター 歯科口腔外科 研修医

平成3年 国立東京第二病院 口腔外科 研修医

平成4年 東京都老人医療センター 歯科口腔外科主事、

平成14年 同センター医長

（東京都老人医療センター・東京都老人総合研究所の組織編成により東京都健康長寿医療センターへ名称変更）

平成21年 東京都健康長寿医療センター研究所 専門副部長

平成28年 同センター病院 歯科口腔外科 部長

平成31年 同センター研究所 口腔保健と栄養研究テーマ研究部長（兼任）

令和4年～ 現職

日本老年学会 理事

日本サルコペニア・フレイル学会 理事

日本老年歯科医学会 理事・専門医・指導医・摂食機能療法専門歯科医師

日本口腔検査学会 理事

日本老年医学会 代議員

日本大学 客員教授・東京歯科大学 非常勤講師・昭和大学歯学部 非常勤講師

【糸田 昌隆先生 略歴】

1988年 岐阜歯科大学卒業 歯科医院勤務

1990年 大阪歯科大学 補綴学第2講座入局

1991年 わかくさ竜間リハビリテーション病院 非常勤勤務

1995年 わかくさ竜間リハビリテーション病院 歯科医長

2003年 わかくさ竜間リハビリテーション病院 歯科・リハビリテーション科 診療部長

2017年 大阪歯科大学 医療保健学部 口腔保健学科 教授

大阪歯科大学附属病院 口腔リハビリテーション科 科長 教授

(所属学会)

日本老年歯科医学会、日本摂食嚥下リハビリテーション学会、日本口腔リハビリテーション学会、日本口腔ケア学会、日本障害者歯科学会、日本補綴歯科学会、日本口腔インプラント学会、日本歯科医学教育学会 など

[SY12-1] 「口腔保健センターと栄養ケアステーションとの連携」

○高田 靖 (公益社団法人 東京都豊島区歯科医師会)

[SY12-2] 美味しいを地域で支えよう！「くりやま健口になっちゃうかい！？」の取り組み

○真井 睦子 (日本赤十字社 栗山赤十字病院 医療技術部栄養課)

[SY12-3] 地域高齢者の低栄養を防止せよ！～歯科からはじまる"社会的処方"と"通いの場"へのかかわり方～

○丸岡 三紗 (まんのう町国民健康保険造田歯科診療所)

[SY12-Discussion] 総合討論

(Sun. Jun 12, 2022 9:40 AM - 11:30 AM 第2会場)

[SY12-1] 「口腔保健センターと栄養ケアステーションとの連携」

○高田 靖 (公益社団法人 東京都豊島区歯科医師会)

【現職及び役職】

公社) 東京都豊島区歯科医師会 副会長
公社) 東京都歯科医師会 成人保健医療常任委員会 委員長
地域保健医療常任委員会 委員長
豊島区介護保険事業推進協議会 委員
介護認定審査会 副会長
豊島区認知症対策推進会議 委員
豊島区在宅医療連携推進会議 委員

【経歴】

平成2年3月 東京医科歯科大学歯学部卒業
平成2年4月 東京医科歯科大学第3保存科入局
平成4年3月 東京医科歯科大学第3保存科退局
平成5年4月 高田歯科医院開設
平成9年4月～平成11年3月 社) 豊島区歯科医師会・総務理事
平成15年4月～平成17年3月 社) 豊島区歯科医師会・会計理事
平成17年4月～平成22年6月 社) 豊島区歯科医師会・専務理事
平成22年7月～平成24年6月 公社) 東京都豊島区歯科医師会・専務理事
平成26年6月～平成30年6月 公社) 東京都豊島区歯科医師会・専務理事
平成30年6月～ 公社) 東京都豊島区歯科医師会・副会長

【抄録】

在宅療養者の中には口腔機能と食形態との乖離がある場合が散見される。これは退院時の食事指導の内容が金科玉条の如く、徹底され在宅での口腔機能のアセスメントがないままに継続されている場合や介護する側がその問題点に気づかないために放置されている場合などがあると思われる。本人の持つ口腔機能に見合った食形態や口腔機能向上のためには低栄養対策とフレイル対策が欠かせない。そのためには入院時から在宅療養までのシームレスな管理と定期的なアセスメント、リハ職による訓練と栄養士による栄養指導など多職種協働が必須となるが、管理栄養士による訪問栄養指導については利用頻度が少ないのが現状である。そこで、東京都豊島区では口腔保健センター「あぜりあ歯科診療所」がハブとなって認定栄養ケアステーションの管理栄養士と管理栄養士を雇用していない在宅医科主治医との間をコーディネートすることで訪問栄養指導を行っている。令和3年の介護保険報酬改定で当該事業所以外の管理栄養士による居宅療養管理指導料が新設され、具体的には認定栄養ケアステーションの管理栄養士と「あぜりあ歯科診療所」との間で非常勤雇用契約を結び、医科主治医に栄養指示書の提供を「あぜりあ歯科診療所」から依頼し、その指示のもと管理栄養士が訪問栄養指導を行い、「あぜりあ歯科診療所」から管理栄養士の居宅療養管理指導を算定。介護保険請求後、管理栄養士に「あぜりあ歯科診療所」から費用を支払う、というスキームを構築した。まだ、実践症例は少ないが在宅療養者やその家族が栄養状態や食形態を意識することで栄養状態の改善、褥瘡の予防など在宅療養生活のQOLの維持向上につながる可能性がある。また、歯科と栄養士が組むことで総合事業の担い手としてフレイル対策に関われる可能性もある。このシンポジウムでは口腔保健センターと栄養ケアステーションとの連携事例を通じて地域での低栄養とフレイル対策について論じたいと思う。

(Sun. Jun 12, 2022 9:40 AM - 11:30 AM 第2会場)

[SY12-2] 美味しいを地域で支えよう！「くりやま健口になっちゃうかい！？」の取り組み

○真井 睦子（日本赤十字社 栗山赤十字病院 医療技術部栄養課）

【略歴】

1989年天使女子短期大学食物栄養学科卒業後、2014年学士習得、2022年天使大学大学院看護研究科前期博士課程（修士）卒業、1989年 中村記念病院入職、2002年 栗山赤十字病院に入職し現在に至る。①資格：管理栄養士、在宅訪問栄養管理指導士、糖尿病療養指導士、人間ドックアドバイザー ②学会・研究会：北海道胃腸研究会世話人、日本在宅栄養管理学会理事・北海道ブロック長、日本褥瘡学会・在宅ケア推進協会理事、くりやま健口になっちゃう会世話人、栗山町地域包括運営協議会副委員長、栗山町高齢者保健福祉計画介護保険事業計画策定委員会副委員長、③共同著書：『PEGケアの最新技術』昭林社、『在宅栄養管理のプロになる！』医学と看護社、『認知症ケアについて』第一出版、『MNAガイドブック』医歯薬出版、『おうちで作る介護食クッキング入門』など。

【抄録】

団塊の世代がすべて後期高齢者に移行する2025年には、高齢化率は30%となり、我が国の高齢化はますます進展することとなります。私が住んでいる北海道栗山町も、高齢化率が40%を超え、元気な高齢者が子育て世代をも支えるという状況となっています。高齢者が多くかかる疾病も全国的に同じ状況が見られ、悪性腫瘍が多く次いで循環器系の疾患です。悪性腫瘍や循環器系疾患は、生活習慣病とされ動脈硬化の進展が主な原因と考えられます。一方で高齢者は、フレイルの概念があり、対策の必要性が議論されています。フレイルは、加齢に伴い複数の生理学的要因が蓄積したことに起因する老年症候群であり、恒常性予備力が低下し、ストレスに耐える能力が低下するため、合併慢性疾患や障害の割合が高く、転倒、入院、そして生命予後に影響を与えるとされています。よく噛む！美味しく食べる口をつくる！ということが大切と考えます。そしてフレイルは栄養状態との関連が深く、フレイルの予防には栄養介入の効果があるとされ、運動療法との併用療法が特に推奨されています¹⁾。高齢者のQOLを維持するために、生活習慣病の重症化予防を図り、高齢者が自立して適切な生活習慣を営めることを目標に栄養教育を行って、適切な栄養摂取をはじめとする生活習慣の改善を目指すために、平成24年、「くりやま健口になっちゃう会」がつくられました。メンバーは栗山町の歯科医師、開業医師、地域の方々となっています。現在はコロナウィルスの影響で勉強会の開催は控えておりますが、小さな講和は各町内会単位で続けております。美味しく食べるを支える為に、地道な活動ではありますが、会の開催を重ね、現在は、当院の歯科回診にもつながっております。私自身は在宅訪問栄養食事指導も行っており、歯科医師の先生には在宅訪問による連携も行い、歯科の先生方には在宅患者の美味しいを支えるためにご尽力いただいております。今回、様々な地域多職種連携による食を支えることを中心にご報告できればと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。参考文献：1) 荒井 秀典：フレイル診療ガイド. 日本老年医学会・ライフ・サイエンス, 東京, 2018, pp.9

(Sun. Jun 12, 2022 9:40 AM - 11:30 AM 第2会場)

[SY12-3] 地域高齢者の低栄養を防止せよ！～歯科からはじまる"社会的処方"と"通いの場"へのかかわり方～

○丸岡 三紗（まんのう町国民健康保険造田歯科診療所）

【略歴】

2013年 四国学院大学専門学校 歯科衛生科卒業

同年 三豊総合病院企業団 歯科保健センター勤務

2015年 まんのう町国民健康保険造田歯科診療所勤務 現在に至る

2019年 徳島大学大学院総合科学教育部博士前期課程地域科学専攻地域創生分野修士（学術）

【抄録】

「あれっ、〇〇さんなんか痩せました？」

いつも定期受診で通っている患者さんが、急に低栄養に陥ってしまった――私たちかかりつけ歯科衛生士がよく遭遇する場面である。

「そうなんよ。実は家内が入院してな、コンビニ弁当しか食べるもんがないんじゃ。」

それは大変！あわてて担当の民生委員に連絡してみたり、宅配弁当をすすめてみたりと、あらゆる手を尽くしたがうまくいかなかった。しかしその後、彼はずいぶん元気そうな顔で定期受診に訪れてこう言った。「あそこの定食屋に通うようになって、体重5キロ増えたんよ。常連客とも仲良くなって寂しさもまぎれたし、ワシはあの定食屋に生かされよるようなもんや」

この人の低栄養を防いだのは、まぎれもなく一軒の定食屋さんだったのだ。

医療の力だけで、地域高齢者の低栄養が防止できると思ったら大間違いなのである。

地域包括ケアをつくるとき、最も邪魔になるのは"自分の専門性へのとらわれ"である。「歯科だから歯科らしい活動をしよう」という思いはいったん捨て、その地域に本当に必要なことは何かを一から考え抜くことが肝要である。

そうして、われわれが行き着いたのは山奥の高齢者をスーパーマーケットに連れて行く"お買い物ツアー"や、サロンで歯科衛生士が開く"お好み焼きパーティ"などであった。

通いの場では、健康教育はあえてやらない。目指すべきは「歯のことをちょっと知ってるお友達」のポジションである。そのほうが住民との距離がグッと近づき、何気ない会話の中で些細な口腔のトラブルについても気軽に相談してもらいやすくなる。通いの場で関わった住民からは、「歯医者は怖くて大嫌いやったけど、あんたたちみたいな優しい子がいるならちょっと行ってみようかな」「あなたと話せるから、歯の掃除に行くのが楽しみなんよ」と、歯科衛生士冥利に尽きる言葉を山ほどかけていただく。

健康無関心層を、いかに"当たり前の歯科医療"につなげるか――それこそが最も大事なオーラルフレイル対策ではないだろうか。

地域に出るときは、専門職らしさは隠し持つくらいがちょうどよい。住民と一緒に楽しんでいるうちに、"結果として"健康になってもらえたらそれでよい。地域医療は「ゆるさが命！」なのである。

(Sun. Jun 12, 2022 9:40 AM - 11:30 AM 第2会場)

[SY12-Discussion] 総合討論

シンポジウム | シンポジウム | [シンポジウム13] 歯科衛生士シンポジウム：歯科衛生士のリサーチマインド ～高齢者への根拠ある口腔健康管理の実践を目指して～

シンポジウム13

歯科衛生士シンポジウム：歯科衛生士のリサーチマインド ～高齢者への根拠ある口腔健康管理の実践を目指して～

座長：伊藤 加代子（新潟大学医歯学総合病院口腔リハビリテーション科 病院講師）、森下 志穂（明海大学保健医療学部口腔保健学科 助教）

Sun. Jun 12, 2022 2:10 PM - 4:00 PM 第2会場 (りゅーとびあ 5F 能楽堂)

企画：歯科衛生士関連委員会

*日本歯科衛生士会認定更新研修

【シンポジウム趣旨】

これからの歯科衛生士には、根拠ある口腔健康管理の実践のため、研究によりエビデンスを創出することが求められている。日々の臨床において生じた疑問を解決する視点、すなわち「リサーチマインド」を持つことが、最終的には対象者のQOLに寄与することとなる。しかし、一方で、歯科衛生士が研究を進める上では、研究の環境等の障壁が存在しているのも事実である。本シンポジウムでは、特に老年歯科医学に関連する分野で研究に取り組む歯科衛生士が、研究の視点、研究の意義と臨床への応用について紹介し、研究上の課題や目指すべき方向性を提言することによって、今後の歯科衛生士の研究活動の発展につなげたい。

【このシンポジウムに参加すると】

- 歯科衛生士が研究に取り組む目的、社会的意義への理解が深まる。
- 歯科衛生士が取り組む研究の具体像を理解できる。
- 高齢者歯科保健の実践から生じたクリニカル・クエスチョンを、リサーチ・クエスチョンに発展させる過程を理解できる。

【伊藤 加代子先生 略歴】

1998年 九州歯科大学卒業

2002年 九州歯科大学大学院修了

2002年 (財)長寿科学振興財団 リサーチ・レジデント

2005年 新潟大学医歯学総合病院 加齢歯科診療室 助教

2015年 新潟大学医歯学総合病院口腔リハビリテーション科 病院講師

【森下 志穂先生 略歴】

2002年 三河歯科衛生専門学校卒業

2002年 あさひな歯科

2010年 豊橋市こども発達センター

2011年 国立長寿医療研究センター研究所

2014年 日本福祉大学経営学部医療・福祉マネジメント学科卒業

2015年 名古屋医健スポーツ専門学校

2016年 東京都健康長寿医療センター（現在に至る）

2020年 明海大学保健医療学部口腔保健学科（現在に至る）

2021年 新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔生命福祉学専攻博士後期課程修了（口腔保健福祉学）

2022年 浦安市障がい者等歯科診療所ひだまり歯科室（現在に至る）

日本障害者歯科学会認定歯科衛生士

日本老年歯科医学会認定歯科衛生士

- [SY13-1] エビデンスを活用する側から創出・発信する立場へー歯科衛生士が研究に取り組むためにー
- 小原 由紀（東京都健康長寿医療センター研究所 自立促進と精神保健研究チーム）
- [SY13-2] リサーチマインドを持つ歯科衛生士を目指して
- 末永 智美（1. 北海道医療大学病院、2. 北海道医療大学在宅歯科診療所）
- [SY13-3] 歯科衛生研究が「伝わる」一言になる！地域での実践例
- 三好 早苗（広島大学大学院医系科学研究科 公衆口腔保健学研究室）
- [SY13-4] 私が目指す研究との向き合い方一気づき、学び、そしてつながりー
- 中山 良子（岡山市立市民病院 診療技術部 リハビリテーション技術科）
- [SY13-Discussion] 総合討論

(Sun. Jun 12, 2022 2:10 PM - 4:00 PM 第2会場)

[SY13-1] エビデンスを活用する側から創出・発信する立場へー歯科衛生士が研究に取り組むためにー

○小原 由紀（東京都健康長寿医療センター研究所 自立促進と精神保健研究チーム）

【略歴】

1998年 東京医科歯科大学歯学部附属歯科衛生士学校卒業

1998～2009年 開業歯科医院勤務

2008年 東京医科歯科大学歯学部口腔保健学科卒業(3年次編入)

2009年 東京医科歯科大学歯学部口腔保健学科 特任助教

2010年 首都大学東京人間健康科学研究科修了・修士（健康科学）

2012年 東京医科歯科大学歯学部口腔保健学科 非常勤講師

同年 文京湯島高齢者在宅サービスセンター

2014年 東京医科歯科大学大学院修了・博士（歯学）

同年 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 口腔健康教育学分野 講師

2019年 東京都健康長寿医療センター研究所 自立促進と精神保健研究チーム（口腔保健と栄養） 専門副部長

【抄録】

私たち歯科衛生士は、臨床の場で常に多くの判断をしています。その判断のよりどころは、成功体験も失敗体験も含めたこれまでの臨床経験が多くを占めますが、常に経験則に基づいて、的確に迷いなく判断ができるとは限りません。歯科衛生士としての臨床は、常に疑問の連続であり、その疑問の根底には、「患者さんに最善の医療を提供したい」、「口腔の健康を支えたい」という思いが流れているはずです。臨床での課題を見つけ、「疑問」を持つことが、歯科衛生士としてのケアの質を高める第一歩となります。

また、専門職として歯科衛生士が行う口腔健康管理の効果を最大限にするためには、科学的な知識の裏付けが必要となります。一人一人の臨床上の経験は、何物にも代えがたい貴重な資源であるものの、単なる経験に裏付けられた勘やセンスだけでは、均質な医療を提供することにはつながりません。生じた「疑問」に対して確かな情報を調べ吟味し、臨床に応用していくことになります。もし、既知の事実からでは解決できない疑問に直面した場合には、エビデンスを活用する立場から、研究のプロセスを通して新しい事実を自ら発見し、その成果を情報発信することが求められます。

つまり、臨床に関わる歯科衛生士にこそ、日々の患者さんとのかかわりの中で生まれた疑問を解決する視点「リサーチマインド」が不可欠です。毎日の臨床の中で疑問を持ち、想像力を働かせ、分析し系統的に問題を解決する力は、最終的に歯科衛生士としての臨床スキルを高め、患者さんの QOL 向上に寄与することになります。ひとつひとつの研究報告が、知見となって蓄積され、多くの人の、そして未来に向けての健康づくりに貢献できるとしたら、それも歯科衛生士としての大きなやりがいになるのではないのでしょうか。

研究とは、「物事について深く考えたり調べたりして真理を明らかにすること」であるとされています。さらに真理とは、誰も否定することのできない、普遍的で妥当性のある法則や事実を意味しています（三省堂 大辞林）。一見、堅苦しく、ハードルが高そうに思える「研究」は、私たち歯科衛生士が自信をもって口腔健康管理に関わり、専門性を高めていく上では不可欠な存在です。

そこで、本シンポジウムを通して、歯科衛生士が研究を行う意義と必要性、実際に研究を行う上で知っておくべき基礎知識についてお伝えするとともに、これからの歯科衛生士に求められるリサーチマインドについて皆さんとディスカッションを深めたいと考えています。

(Sun. Jun 12, 2022 2:10 PM - 4:00 PM 第2会場)

[SY13-2] リサーチマインドを持つ歯科衛生士を目指して

○末永 智美（1. 北海道医療大学病院、2. 北海道医療大学在宅歯科診療所）

【略歴】

2005年 北海道ハイテクノロジー専門学校 歯科衛生士学科 卒業
2005年 北海道北広島市 なかじま歯科診療室 勤務
2011年 社団法人北海道歯科衛生士会 勤務（北海道委託事業担当）
2012年 北海道医療大学病院 勤務（歯科訪問診療担当）
2019年 北海道医療大学病院および北海道医療大学在宅歯科診療所 兼務
2021年 北海道医療大学大学院歯学研究科 歯学専攻博士課程 修了

2011年 社団法人北海道歯科衛生士会 理事
2017年 一般社団法人北海道歯科衛生士会 副会長

【抄録】

「リサーチマインド」と聞いて、皆さんはどんな印象を持ちますか。

皆さんは歯科衛生士として目の前の患者さんの口腔の健康管理を通じて全身の健康維持を目指し、日々様々な環境で奮闘していることと思います。我々の活躍の場は近年、歯科診療所や病院の中にとどまらず、介護施設や在宅などの介護や生活の場へと広がっています。そのような臨床の現場では「疑問」を抱くこともあり、より患者さんのためにできることがないものか、と日頃感じてきました。

しかし、それらの解決に向けて実際取り組み始めたのは、歯科衛生士として経験を積んでからでした。養成校の卒後1年目は、「患者さんに信頼される歯科衛生士になりたい。」と歯周病専門医の歯科医院で外来患者さんと関わることに充実感を抱いていました。ところが次第に、通院できない患者さんの存在を意識するようになり、「通院が難しくなっても患者さんに寄り添い続けられる歯科衛生士になりたい。」との思いから、縁あって現在、本学の訪問診療の専任歯科衛生士とし勤務し11年目を迎えています。訪問診療では、生活や介護に関わる職種との関わりが多く、認知症の方との接し方や多職種との連携の意義などについて多くの学びを得てきた一方で、新たな「疑問」も生じました。「なぜ、在宅から施設、施設から病院など生活の場の変化とともに歯科の情報が抜け落ちてしまうのか。」、「ケアマネジャー（CM）との連携で、歯科衛生士には何が求められているのか。」と考えたのです。CMへアンケート調査を実施すると、CMの扱う項目に歯科に関する情報がそもそも十分ではない可能性が明らかになりました。さらにその調査結果を本学術大会等で報告し、全国の会員の方と情報交換することが疑問解決のヒントとなりました。「リサーチマインド」を持って業務を行う面白さを実感した瞬間です。疑問を見過ごすことなく、エビデンスを確立する臨床研究に取り組むことは、口腔健康管理を根拠に基づいて実践する拠り所となり、専門職としての責務であるとも感じました。このような体験を契機に社会人大学院を経て、認知機能が低下した方の口腔機能の評価方法や機能低下の予測因子の探索にテーマを定め、臨床研究に取り組んでいます。

研究をしよう！と思うと、何か壮大なテーマを持って挑まなくてはならない敷居高いもののようにも感じますが、研究のスタートは、日常的な臨床現場から得られる小さな「気づき」です。おそらく皆さんも持っていることと思います。今回は、現場での気づきから抱いた「疑問」をどのように研究構想へと繋げてきたのか、私がこれまで行ってきた臨床研究を通して皆さんにお伝えしたいと考えています。

(Sun. Jun 12, 2022 2:10 PM - 4:00 PM 第2会場)

[SY13-3] 歯科衛生研究が「伝わる」一言になる！地域での実践例

○三好 早苗（広島大学大学院医系科学研究科 公衆口腔保健学研究室）

【略歴】

1998年 広島大学歯学附属歯科衛生士学校 卒後
1998年 一般歯科診療所勤務
2008年 広島県竹原市の地域歯科保健事業に従事

2013年 広島大学歯学部客員講師

2018年 広島大学大学院医系科学研究科 博士課程前期修了 修士（口腔健康科学）

2021年 一般社団法人広島県歯科衛生士会 会長

【抄録】

平成18年度の介護保険法改正により介護予防事業が創設され、高齢者の口腔機能向上を目的としたプログラムが各地域で実施されてきた。近年では、「高齢者の保健事業と介護予防との一体的実施」において通いの場への医療専門職（保健師、管理栄養士、歯科衛生士等）の介入による疾病予防、生活機能の改善が期待されている。

このように、私たち歯科衛生士は、15年以上前から地域の介護予防事業や口腔健康管理に携わってきた。しかし、その成果や効果的な介入方法について科学的に証明された報告は少なく、その多くは学術大会での発表にとどまっているのが現状ではないだろうか。残念ながら、どんなに優れた研究成果を学術大会で発表しても、その後、論文として発表されなければ、実践によって得られた知見は根拠がないものと判断されてしまう。研究結果を論理的に分析し、文章化して論文として発表する作業は容易ではないが、やらなければ研究はそこで埋もれてしまい、臨床や現場で活かすことができなくなってしまうのである。そのため、歯科衛生士が自らの経験や臨床で疑問に感じたことを研究に昇華させ、論文として発表することは、社会に貢献するだけでなく、論文を読んだ各分野の歯科衛生士の資質や実践力の向上に寄与するものと考えられる。

私が研究をはじめたきっかけは、地域の通いの場への関わりの中で、「口腔体操を長期間継続して実施すると、高齢者にどのような効果をもたらすだろうか？」という疑問からだった。研究をはじめするには、過去の文献を調べ、これまでに分かっていることと分かっていることを明確にして、その研究を行う価値があるかどうかを検討する必要がある。多くの文献の中から、自分の研究と関連する文献を探し出すのは労力がいる作業であるが、さまざまな研究との出会いは、歯科衛生士としての知識や視野を広げるきっかけになるといえる。私自身がこの作業を夢中になって取り組むことができたのは、きっと「知りたい!」「解決したい!」と思うリサーチマインドがあったからであろう。目の前の出来事に興味・関心を持ち、「なぜ?」「どうして?」と深く考ながら調べていくことは、心がワクワクするような楽しいものである。また、研究成果をまとめる作業も研究をはじめると以上に大変ではあるが、自分が実施してきた研究内容を改めて客観的に見直す良い機会となるといえる。

本シンポジウムでは、歯科衛生研究をはじめるとにあたり取り組んだこと、そして、研究成果をどのように地域で活用しているのかについて実践例を紹介していきたい。

(Sun. Jun 12, 2022 2:10 PM - 4:00 PM 第2会場)

[SY13-4] 私が目指す研究との向き合い方一気づき、学び、そしてつながり

—

○中山 良子（岡山市立市民病院 診療技術部 リハビリテーション技術科）

【略歴】

2003年 ベル歯科衛生専門学校（現、朝日医療大学校歯科衛生学科）

2003年 医療法人津高台グリーン歯科

2006年 特定医療法人万成病院歯科

2007年 医療法人青木内科小児科医院あいの里クリニック・歯科

2011年 鳥取市立病院

2018年 岡山市立市民病院

【抄録】

歯科保健医療の社会的ニーズが多様化し拡大する中で、歯科衛生士は歯科診療所のみならず、在宅、介護保険施設、病院等の様々な場所で従事している。広い視野を持ち、患者の生涯を見据えた口腔健康管理を支援し続けるため、質の高い人材育成を目指した生涯研修の推進が求められ、歯科衛生士教育は変革の時を迎えている。卒業前の教育は、2018年に改定された「歯科衛生士教育コア・カリキュラム—教育内容ガイドライン—」で

は、知識注入型の教育方法から、生涯にわたり自ら課題を探究し、問題を解決していく能力を身に付けられるよう、学生主体の学習方法に積極的に転換することが必要とされている。しかし研究に関しては、コア・カリキュラムにはなく、学生時代に研究に触れることができるかは、独自科目として養成校に委ねられている。卒業後の学習に関しては、日本歯科衛生士会の生涯学習事業が企画・運営・促進され、特定の専門分野において認定制度も設けているが、会員数は就業歯科衛生士全体の約15%に留まっている。そのため、入職先の教育体制に依存する場合が多く、歯科診療所で勤務する場合は歯科医師の専門分野や患者の年齢層など、個人の経験に偏りが生じている可能性がある。また一般の臨床現場においては診療業務重視の傾向にあり、必ずしも研究に恵まれた環境とはいえないのではないだろうか。

市中病院で働く私にとっても、日々の臨床のなかで研究や発表のために費やすことができる時間には限りがあり、研究と向き合うことは容易ではない。だが、臨床の中で生まれた「なぜ？」に出会えたことで、与えられる情報だけでは解決せず、自ら学び続けなければならないことの大切さを知ることができた。そして今は、研究は特別なことではなく、研究と臨床は表裏一体のものと考えられるようになっている。それは、臨床での「気づき」と「学び」の経験を繰り返すことで、研究への興味や必要性を認識することにつながり、私自身のキャリアデザインを描くきっかけとなったからである。研究の過程で学んだことや結果もさることながら、指導していただいた方々とのつながりは、私自身の財産でもある。職場の環境、同僚や多職種との関わり、成長を支援してくださる指導者とのめぐり合わせなど、人と人との「つながり」こそがリサーチマインドを養い、キャリアデザインを設計する要となると考えている。

令和3年度以降、基礎教育における臨床現場での、実習経験が極めて少ない歯科衛生士が入職する未曾有の事態となっており、今後リサーチマインドを育む教育環境確保とキャリア開発支援が重要である。今回のシンポジウムでは、我々歯科衛生士が研究を身近に感じ実践できるよう、教育機関、歯科医療機関、学会との連携に基づく教育体制についても皆様とディスカッションしたい。

(Sun. Jun 12, 2022 2:10 PM - 4:00 PM 第2会場)

[SY13-Discussion] 総合討論